



は

つと見の印象は、AKB48の人気に便乗した際物、だろう。『憲法主義』といふタイトルも耳慣れないし（実際、そういう専門用語はない）、帯でも、著者の表記でも、高校生（現在は慶應大学学生）の内山奈月さん（書店で前面に押し出している。書店では、アイドル本のコーナーに並んでいることが多い。

しかし、中身はまったく違う。この本は、もともと憲法に関心を持つていたという新進アイドルと氣鋭の憲法学者による「正統的な憲法の入門書」なのである。学者であれば、既存の教科書をコンパクトにまとめた無味乾燥な概説書なら誰でも書けるだろう。ところが、優れた入門書というものは、アイドル本のコーナーに並んでいることが多い。



「憲法主義
条文には書かれていない本質」
内山 奈月、南野 森 著
(PHP研究所/1200円)

警察官の身分や職責は、地方公務員法や警察法で定まり、権限は決まっている。そして、そうした法律は、憲法に基づいて国会の議決で決められたものだ。言うなれば、行為そのものではなく、それに色を付ける法律が行為の性格を決める。その法律に効力を与えるのが憲法の主要な役割である。

務員法や警察法で定まり、権限は決まっている。そして、そうした法律は、憲法に基づいて国会の議決で決められたものだ。言うなれば、行為そのものではなく、それに色を付ける法律が行為の性格を決める。その法律に効力を与えるのが憲法の主要な役割である。

玉井 克哉

東京大学先端科学技術研究センター教授

選・評

【名著】

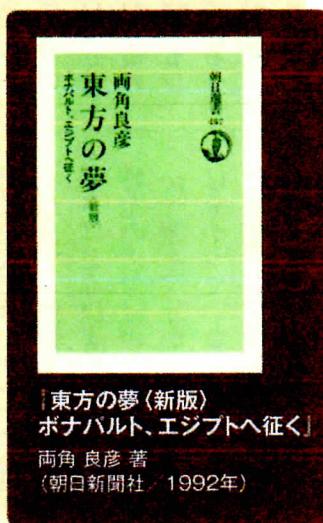
ナポレオン研究の傑作

元アラビア石油取締役
庄司 太郎

29歳の将軍ナポレオンが、地中海のマルタ島を制圧し、エジプトに向けて3万3000人の大兵力と考古学者などを同行させてマムルーク朝と戦ったのは1798年。この一大遠征を在野のナポレオン研究家である元通商産業事務次官の両角良彦氏がまとめた。

当時のナポレオンの夢と決意、内外反対勢力の思惑、ロゼッタストーンの発見に始まるエジプト学、近代化された西洋と中世のままだったアラブ・イスラム社会の文明の衝突などが愛情を持って的確に叙述されている。

もっとも、煌びやかな衣装に身を包んだマムルークの騎士たちがフランス革命の国民軍と戦ったのだから勝敗は見えていた。西欧の絶対的な優勢へと歴史は舵を切る。本書は、現代の読者に興味をも明快に応えてくれる。



「東方の夢(新版)
ボナバトル、エジプトへ征く」
両角 良彦 著
(朝日新聞社 1992年)

また、講義を受ける内山さんは驚くほど聰明だ。各章の内容を要約したノートも、非常によくまとまっている。とはいえ、憲法に限らず、法律というものは世の中を動かすためのルールだ。彼女は長く生きてきたオジサンたちに、高校生に分かる話が分からぬはずはない。出版社の販売戦略はそのままになっている。とはいっても、憲法に限らず、法律というものは世の中を動かすためのルールだ。彼女より